座談会

自分を語る場を学校につくり生徒の学びの意欲を高める

2013年度、「高校生未来プロジェクト」のワークショップを校内で実施した4校の教師が集まり、参加した生徒の変化の様子や、生徒の学びの意欲を高めた要因、そして今回の取り組みをどう今後の指導に生かしていくのかについて、熱く語り合った。

学びの意味を考え、発信する場をつくりたかった

――高校生未来プロジェクト（以下、未来ＰＪ）を自校で実施した理由をお聞かせください。

西山　本校は、中高一貫コースの生徒を対象に実施しました。生徒たちは、進学意識は高いのですが、「何のために大学に行くのか」が明確になっていない生徒も少なからずおり、学習態度にいま一つ貪欲（どんよく）さが感じられませんでした。未来ＰＪで大学進学の目的や意味を発見し、学びが主体的になればと考えました。

中村　本校は女子校であり、「女性として社会の中でどう生きるか」といったことを考えるための講演会などは充実しています。しかし、そこで語られる内容は、生徒にとってはどうしても「少し先の話」であり、学習意欲や進学意識の向上には結び付きにくい部分がありました。学びの意味を生徒主体のワークショップの中で考えることで、今の自分に満足せず、高校の学習に意欲的に取り組むようになってもらいたいと思い、実施しました。

前中　1年生の夏休み明け、とても疲れている生徒たちの様子を見て、勉強していることが将来にどう結び付くのかがイメージ出来ないまま、量をこなしていることに苦しんでいるのではないかと感じました。そこで、学びの大切さを知ってもらい、生徒を元気付けようと、学年団の教師が高校・大学生活を語る学年通信を配布したり、高校の勉強の意味を大学生に話してもらう交流会を実施したりしましたが、他人から聞くばかりではなく、自分で考え、気付い

埼玉県立大宮光陵高校校長
久保島昌一　くぼしま・しょういち

教職歴36年。同校に赴任して2年目。「未来ＰＪを実施して1番良かったことは、生徒のリアルを見られたことです。生徒の実態を丹念に追い掛け、その上で指導を組み立てることの大切さを再確認しました」

東京都・私立白梅学園高校
中村雅一　なかむら・まさかず

教職歴25年。同校に赴任して23年目。担当教科は英語。「未来ＰＪの成果についてこうして先生方と話し合ったことで、『私ももっと頑張らなければ』と刺激を受けました。対話は、教師の向上心も高めるものです」

たことを発信する場も必要だと思い、未来ＰＪの実施を決めました。

久保島 私は、以前からインプット中心の授業に限界を感じていました。授業中、生徒は正解を答えさせられることはあっても、自分の考えを述べる機会はほとんどありません。本校にも、勉強に真面目に取り組み、量もこなしているのに思うように成績が伸びない生徒がいますが、もしかすると、学んだことを基にして自分の考えをアウトプットするに至っていないからではないかという思いが強くなっていました。

大阪府・私立初芝富田林高校
前中マリヤ まえなか・まりや
教職歴18年。同校に赴任して14年目。担当教科は国語。「未来ＰＪで、生徒の中に大きな可能性があることを再認識できました。校務に追われがちな教師のモチベーションの向上にもつながったと思います」

安心して自分を語る場を意図的につくる必要がある

――未来ＰＪのワークショップの中で、印象に残っている場面を教えてください。

西山 ワークショップが始まって最初のうちは、自分の考えを話すのが恥ずかしくて、対話に集中できない生徒も少なくありませんでした。そうした生徒に変化が見られ始めたのは、現代社会の課題とその解決策について、大学生の先輩と話し合うプログラムの時です。以前は、先輩との交流といえば、受験勉強の体験談を聞くのがほとんどでした。ところが、大学生にも正解が分からないテーマについて語り合うことで、生徒たちの対話へののめり込み具合が明らかに変わっていきました。

山口県・私立慶進中学・高校
西山智彦 にしやま・ともひこ
教職歴6年。同校に赴任して7年目。担当教科は国語。「今回のワークショップに参加したことで、生徒同士の対話を授業やＨＲに意識的に盛り込むようになった教師もいます。良い影響が確実に校内に広まっています」

中村 生徒が社会問題についての自分の考えや、将来に対する期待と不安を赤裸々にみんなの前で述べる場面が印象的でした。その結果、クラスの中に真面目な発言を抵抗感なく受け入れる土壌が出来たと思います。やはり、真面目な話が出来る場は、教師が意図してつくっていくことが大事だと思います。

――事後アンケートで、「真面目な話をしてよい場をつくってもらったから、安心して話せた」「周りの人たちが、うなずきながら聞いてくれたので、話しやすかった」と振り返る生徒はとても多かったです。授業では、言語活動の充実などを背景に、生徒同士で意見を述べ合う機会が増えているのではないのですか。

久保島 生徒の多くは、授業で発言を求められた時、教師にだけ聞こえるような小さな声で話しがちです。この時は、その生徒と教師だけのやりとりになり、周りの生徒の関心はそこに向きません。発言を求めた生徒に「きみの意見を、教室にいるみんなが聞きたいんだ」ということを理解させる努力が教師に必要です。

前中 自分の意見が友達にどう受け止められるか、生徒はとても不安を持っています。国語の授業で、作品の感想を書かせることがありますが、それらをクラス全員に紹介しようとすると、「先生が読むのはいいけれど、みんなに読まれるつもりでは書いていない」と言われることは少なくありません。だから、今回のワークショップで、自分の本音を友達にぶつけ、それが受け入れられたことは新鮮な体験だったはずです。

西山 そういう意味では、このワークショップは生徒の内面に風穴を開ける作業だったと思います。実際、ワークショップから1か月後、「新

年度の目標をみんなの前で発表してほしい」と私が言ったところ、クラス全員が自ら進んで発表しました。恥ずかしいと尻込みする生徒がいなくなったのは、もうクラスで自分を隠す必要がないからなのでしょう。

中村　生徒は、人と違ったことを言ったり、失敗したりするのは恥ずかしいことだと思っています。でも、自分のいる空間が居心地良くなってくると、素の自分を少しずつ出せるようになり、次第に失敗も恐れなくなるのでしょう。

前中　事後アンケートの中に、「自分の話を他人に聞いてもらいたいと、自分がこんなに欲しているとは思わなかった」という言葉がありました。生徒の内面には、自分を熱く語りたいという思いがあり、その思いがかなう場を教師がつくる必要があるのだと改めて実感しました。

久保島　自分のことを話すことへの抵抗感がなくなり、自分という主体が前に出た時、伝えるための言葉の大切さ、論理の重要性に気付くのでしょう。そうして初めて生徒たちは、すっと学びに向き合えるのだと思います。

自分を十分に見つめることで初めて他者に目が向いていく

――未来ＰＪでは、学びの意味や目的を考えることがテーマでした。生徒は、それらをどのように見いだしていったのでしょうか。

久保島　ワークショップ開始当初、多くの生徒から出てきたのは、「学びは自分のため」「将来のため」といった言葉でした。それらは全て自分に引き寄せた言葉であり、学びの目的は実に利己的です。ただ、私はそれが悪いことだとは思いませんでした。社会経験の乏しい生徒が、まず自分がしっかりしようと考えるのは当然のことだからです。しかし、ワークショップを続けるうちに、学びの目的を語る生徒の言葉は、「社会のため」「他者とつながるため」と外向きに変化していったのです。これは、安心して自分の意見をアウトプットし、他者と共有したから生まれた変化なのではないでしょうか。

前中　話を聞いてもらえたことが気持ちいいと生徒が感じたのは、自己肯定感が得られたからでしょう。だから、社会に貢献できる力が自分にもあるかもしれないと生徒が気付いたのだと思います。

久保島　そう思います。逆に言えば、生徒が自分のことを安心して語ることがないまま、「学んだことをどう社会で役立てたいか」と生徒にいきなり問い掛けても、生徒が学びの目的を社会と結び付けて考えることは難しいのではないでしょうか。

中村　生徒は教師が期待している回答を予測して、もっともな言葉を返すかもしれませんが、それはきっと本心ではないのでしょうね。その時生徒は、こんなふうに話せば先生は納得するだろうと考えて、上手に話の落としどころを見つけているだけなのかもしれません。

前中　私はこれまで、学んだことを生かしてどのように社会貢献したいのかを、生徒に性急に問い掛けてしまっていたと思います。社会貢献に意識が向かない生徒を責めるような気持ちがあったのかもしれません。卒業生が大学入試を振り返る時、「大好きなおばあちゃんを喜ばせたいから頑張った」「見守ってくれた担任

「ワークショップは『これからは自分のことを語ってよいのだ』と生徒が気持ちを切り替える作業だった」 西山

の先生に良い報告をしたかった」など、身近な他者の存在を挙げるケースが少なくありません。これも実は、学びの目的が利己から利他へ、ゆっくりと広がっているのだと思います。「社会にどう貢献したいのか」をいきなり聞くのは、生徒の意識の広がりや深まりと逆行していたのかもしれません。

西山　「将来の日本の課題と解決策」を生徒が発表した時、はっとするアイデアも出ましたが、それ以上に本人たちの納得した言葉を聞けたことに私は感動しました。それまでのグループでの対話の中で、ここでは本気で話してよいということを実感できていたから、少し利他に目が向くようになったのかもしれません。

久保島　「話せて良かった」という安心感、納得感を得た上で、「もっと伝えたい」という欲求が出た時に、生徒の学びの意欲が向上するのだと思います。

「自分の考えを十分に表出できて、ようやく生徒の視線は他者へと向けられていく」 久保島

西山　実際、ワークショップを経て、学習への取り組み方の質が変わった生徒は少なくありません。今までは「やるのが当たり前」だと思っていたから嫌々机に向かっていたけれど、何のためにやるのかを思い出しながら、前向きに勉強に取り組めるようになったと、生徒は話していました。

久保島　ただ、そうした生徒の変化は、教師が簡単にコントロール出来るものではなく、やはり時間を掛けて待つべきものだと思います。今回、ファシリテーターの方が話し合いの中で、「自分の思いを語った相手に、必ず『なぜ？』と聞いてあげてください」と生徒に言っていました。「なぜ？」と問い掛けられた生徒は、一生懸命に説明しようとしていましたが、それは今思うと、生徒に変化を促す1つのスイッチだったのでしょう。効率性が求められる授業では、常に出来ることではないかもしれませんが、私たち教師も留意すべき指導のポイントなのだと思います。

教師にも対話する機会が必要

――未来ＰＪの実施によって、生徒だけでなく、教師にもさまざまな影響があったのではないでしょうか。

前中　本校では、生徒向けの未来ＰＪを実施する前に、デモンストレーションという形で、教師対象のワークショップをファシリテーターの方に行っていただきました。実際にワークショップに参加することで、「なぜ学ぶのか」を他者に伝えることは決して簡単なことではないと、私たち自身が理解できました。今の高校生が、「勉強の意味や目的が分からなくても、それでもやるしかない」という感覚になってしまっているのは、もしかすると私たち教師がそうした感覚で学びを捉えたまま、生徒に接しているからなのかもしれないと思いました。そういった意味では、教員の研修としても価値がある取り組みだったと思います。

中村　私は教師になって25年ほど経ちますが、新任の頃に比べると明らかに職員室での雑談が減っています。「雑談する暇があったらこの課題の採点を済ませなくては」などと、やらなければいけないことが山積みで、それはきっと国公私立を問わず、どの高校も同じだと思います。そういった状況ですから、仕事上の関わりのない先生とは本当に会話をする機会が少なくなっています。思ったことを語り合う場は、生徒同様、私たち教師にもますます必要になっている気がします。

西山　生徒向けであれ教師向けであれ、こうした取り組みを校内に広めていくためには、教師間のコンセンサスが必要です。その際、全員が納得しやすいのは、やはり取り組みの成果が何らかの数値で表れた時です。ですから、未来ＰＪの成果を客

観的に把握できるような仕組みが出来ればと思います。ただ、その一方で、具体的な成果を焦ることで取り組みの価値を見失う恐れがあることも十分理解しています。

前中　生徒の変化を数字で説明できない部分は、教師自身がどれだけ実感できるかが鍵なのでしょうね。数字に出来ないものの中にも大事なものがあることを、私たち教師は十分に分かっているのですから。

久保島　校長としては、未来ＰＪのようなワークショップに先生方が参加することで、授業でアウトプットする機会をつくることの大切さを実感していただきたいと思っています。もちろん、ワークショップでの体験を授業やＨＲで生かそうとするのならば、教師にもファシリテーターとしての力量が必要ですから、適切な研修の場も設けていくべきだと思います。

中村　外部の方をファシリテーターとして招く場合も、生徒たちの特性を私たち教師がファシリテーターにしっかりと伝えることで、より自校に合ったワークショップを実現できるはずです。

「『人は、なぜ学ぶのか』を自分の言葉で語ることが、私たち教師には求められている」**前中**

日常の中に小さな場を数多くつくっていく

――未来ＰＪのワークショップは、学校の中では非日常の時間だったと思います。今回の経験の中に、先生方が日々の授業やクラス経営などに生かせる点はありましたか。

前中　今考えているのは、小論文指導です。多くの学校同様、本校でも小論文指導は3年生になってから本格化します。しかし、入試のための書き方指導が3年生からであったとしても、小論文が課される学部系統を目指す2年生を対象に、未来ＰＪのような対話の場を設けて、書くための引き出しを多くつくってあげると良いのではないかと思います。

西山　私は今年度から、新聞記事に目を通して、授業中に意見を書く取り組みを始めましたが、ただ書くだけではなく、生徒同士で読み合い、コメントを付けて相手に返すという取り組みにしています。自分の意見を持ち、それを相手に伝え、そしてその反応を返してもらうコミュニケーションの場面をたくさんつくっていきたいと思っています。

中村　ワークショップ後の変化の速度は、生徒によって違うでしょうから、事後アンケートを踏まえつつ、個別面談などを重ねながら、生徒一人ひとりの変化を見守っていきたいですね。また、個人的には、新入生向けの取り組みとして、未来ＰＪのようなワークショップをやってみたいと思っています。高校生になって意識も高まっている時期に、何のために学ぶのかを新しい仲間と考えることは、学習意欲や進学意識の向上、更にはクラスづくりの面で有効だと思います。人間関係が構築されていない時期だからこそ、抵抗感なく本音が言い合えるというメリットもあるでしょう。1年生の学年団に配属された教師にとっては、1年生と一緒に学びの意味を考えることが、3年間の高校生活を見通す研修のような機能を果たすはずです。

久保島　未来ＰＪのような大掛かりな場も必要ですが、日常の中に小さな場を数多くつくることも大切だと強く思います。本校では、今年度から主体性の育成を目的に、全校集会などで教師の代わりに生徒が前に立つようにしています。もちろん、教師が前に立った時のようにすぐに整列が出来るわけではありませんが、先生方は焦らずに生徒の成長を見守ろうという気持ちでいます。そうした小さな場を積み重ね、待つことが、生徒の意識を耕すことになるのではないでしょうか。

「入学直後、学びの意味を語り合うことは、学習意欲の向上や人間関係の構築につながる」**中村**